

No. J2306
現代イースター島におけるラパ・ヌイ文化の尊厳に関する民族誌的研究
静岡文化芸術大学文化政策学部 准教授 内尾 太一
2022 年度及び 2023 年度、りそなアジア・オセアニア財団の研究助成を受けて、私は「現代イースター島社会におけるラパ・ヌイ文化の尊厳に関する民族誌的研究」に取り組んだ。この期間、新型コロナウイルスの感染拡大により、イースター島は 2022 年 8 月まで約 2 年半のロックダウンが続いていた。 元々の計画では、モアイ像などの遺跡を巡るオーバーツーリズム、チリ共和国に対する自治や独立への動き、そして西洋諸国に対する遺物や遺骨の返還運動を取り上げる予定であったが、世界的なパンデミックの影響でこれらの動きが停滞し、計画の軌道修正を余儀なくされた。 私は助成を受ける以前の 2020 年 3 月にも現地調査しており、それはロックダウン直前の時期であったため、本研究助成でパンデミックの前後にまたがる意義深い研究ができると考えた。観光が再開された後、再びイースター島を訪れた際には、隔離と物資不足の期間をどう生き延びたかを探求した。伝統的な習慣や価値観がどのようにしてその困難を乗り越える上での支えとなったかを明らかにし、ラパ・ヌイ文化の尊厳に迫った。助成期間中、2 度の訪問で毎回 50 人の島民に構造化インタビューを実施し、信頼を得た現地の協力者からロックダウン中の詳細な出来事を聞き取った。 調査の結果、島の人々は、収入の激減にもかかわらず、物々交換やリサイクル、そして土地に根付く食糧自給を通じて困難を乗り越えていたことが明らかとなった。「umanga (ウマンガ)」というラパ・ヌイ語は、島伝統の助け合いの精神を意味し、文化的レジリエンスを象徴している。このような物質的な欠乏を精神的な豊かさで補った彼らの知恵は、ラパ・ヌイ文化の尊厳として讃えることができる。